
君たちに届けたい手紙

桜桃 ユメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君たちに届けたい手紙

【Zコード】

Z3673A

【作者名】

桜桃 ユメ

【あらすじ】

君たちに届けたい手紙そんな手紙を届けるために今旅立つ

一 旅立つ

いつか届くだらう手紙。

君たちに届けたい手紙。

どんな場所でも届けてみせる例え自分の存在が消えてしまつても…

そうたとえたつた一通の手紙でも確實に何かが変わるのだから… 一

旅立つ（一）俺は、これから相棒に【飛び乗つた】。

異様な形をしているそれは、一見しただけでは、何なのか分からない。

まるで何かのえさのような形。

食欲を誘うような色あい。いい香りが漂つてきそうな雰囲気。食べ物にしては、大きすぎる大きさ。そんな相棒は、もちろん食べ物ではない。ちゃんととした乗り物なのだ。ただ他の乗り物とは、明らかに違う。何が違うかと言うと… 思いを届けるための乗り物。俺は今から旅立つ【君たちに届けたい手紙】を届けるために…

「本当にいいのか？死ぬだけではなくお前の存在自体が抹消されるかもしれないんだぞ。」

彼は確かめるように言つ。

「ああ分かってる。それでも俺は行かなくてはならないんだ。希望を届けるために。お前も分かっているだろ。だからこれ以上何も言わずに友の旅立ちを見届けてくれないか」

数秒の沈黙。彼は、俺の目を真つ直ぐに見つめ

「もう何を言つても意味がないんだな…。そうか…分かつたもう何も言わずに見届けてやるよ。お前の旅立ちを。ただひとつだけ言わせてくれ帰つてこいよ。」

「おう。」

俺は、気楽にさつ言つ。そして上部ハッチを閉じ、彼に向かつてオーナー・ケーサインをだす。彼は、うなずき目の前にある装置を動かしだす。それにより俺の乗っている相棒の安全装置がはずされていく。

それを確認すると俺らは、再び目を合わせ、互いにうなずきあう。そして俺は目の前にある、システム起動パネルの電源を入れる。俺は、すべてのシステムに異常がないことを確認して、ベイツトシステムを起動させた。

「じゃ行ってくる。」

外部スピーカーのマイクに向かって俺は、もう一度と戻つて来られないことを知りながらもすぐに帰つてくるよつた言い方した。

俺は、ベイツトシステムの起動を確認した。

間違いなく起動している。

これから旅の命綱なのだからいきなり作動しないでは、はなしにならない。

とりあえず旅には出られそうである。あとはあいつが食いつくのを待つだけだ。

嵐の前の静けさ。

それを匂わす数秒の静寂。

ドックン何かの脈動が感じたと思うと突然耳に痛みが走り、寒気を感じる。

いきなり気圧が下がつた。

そして四方八方から空間にひび割れが入り始める。やがてひびが乗り物のある空間までのびてくる。そのひび割れた空間を何かが打ち破る。破られた空間より何かが顔をだす。その顔をだした生き物に彼の乗つている乗り物は、飲み込まれた。ひび割れた空間は、まるでビデオの逆再生を見ているように元に戻つていた。その空間に入つたとたん警報がなりだした。耳が張り裂けそうになるぐらいの勢いに驚きながらも俺は、システムパネルの上を見た。どこに異常があるのかはすぐに分かつた。バリアを張るのを忘れていたのだ。

「おつと大変だ！！早くしないと機体がとけてしまう

俺は、バリアのスイッチをいれた。

バリアが張られるとき警報は鳴り止んだ。

俺は、ふうとため息をつき外部モニターに目を移し、外の情景を見

た。そこには、無数に開いた穴と薄き気味悪いピンク色の壁があった。壁は、どくどくと脈うち濁り切っていた。それ以外は、本当に何もなかつた。ただ広さだけが際立つていた。どこまで続いているのか俺には、想像できないぐらい広かつた。

「……うひや……ひれえな……大丈夫かこれから…」

これから旅に不安を感じつつ俺は、独り言をもらした。一人きりの旅なので自然と独り言がおおくなつてしまつ。道ずれが欲しいなあと思った。正直一人でいるのがつらいなあと思う。まだ旅に出たばかりだというのに…。

「さてまずはどこに行けばいいのかなあ？？？」

とまた一人ごとだと知りつつ言葉をもらしてしまつ。（まあどうせ一人だしいいか）と心の中で思い開き直つて独り言を続ける。「えつと… そうそう確か出るときにはプログラムしておいたはずだから… 目的地までのルートは出てくるはずだ。」

といいながらタッチパネル式の操作パネルをいじる。

「えつとこうして… ここ のファイルを開いてと… そうそうこれ、これ… これだ」

やつとの思いで目的のファイルを見つけルートを表示させたその瞬間…

「緊急事態発生、緊急事態発生。直ちにここ の空間から退避せよ。繰り返す直ちにこの空間を退避せよ。」

と無機質な合成音声が響く。すぐになぜそうしなければならないか思い当たつた。異物排除措置だ。早く逃げないと免疫獣にやられてしまう。この空間に入つてすぐにやるべきだった。ここから離れることを…

「えーい… いまさら悔やんでもしようがない。とりあえず逃げなくちや」

そんなことをいいながら俺は、自動操縦を解除して、TNT 加速装置のスイッチを入れた。

ゲームのコントローラーを改造した操縦桿を握り、出力を全開にす

る。

体が座っている椅子に押し付けられる。
一気に最高速度に達する。

思わず操縦桿を放しそうになりながらも、俺は、必死になつて操縦する。

バックモニターを見てみると、今まで俺がいた空間は、免疫獣が群がっている。危ないところだつた後ほんの数秒遅かつたらやつらの餌食なるところだつた。警報装置がまたまた鳴つた。不注意だつた。バックモニターなんか見てないで前を見入るべきだつた。前を向いたときには、もう遅かった目の前には、もうあの薄気味悪い壁があつた……。

一一 「ヨリガエリ」 桜

二 「ヨリガエリ」 桜

太陽が沈んでいく。夕日に映える桜。村で一番大きい桜。伝説が残る桜。忘れられることのない思いを届ける桜。そんな桜の木下で彼は「桜咲く季節に…必ず俺は、戻ってくる。君に出会ったこの場所に。その時まで俺のことを忘れないでくれ…」

と私に言った。

彼が死地に赴く前の日のことだった。

山櫻桃 桜十五歳のできごとだった。

待つても、待つても彼は帰つてこなかつた。

桜咲く季節が幾度となく過ぎ去つても…彼は、帰つて来なかつた。私の涙は、枯れることを知らない泉のよう、せき止めることのできない雪崩のように、溢れていった。溢れる涙とともに何かを失つていった。

そして何が悲しいのかさえ分からなくなつていった…夕暮れ時。桜が夕闇に消えていく。

儂さと同時に清らかさを感じる季節。

ゆつくりと沈みゆく空。

流れしていく季節…そして今年もこの季節がきた。

流れゆく涙。

歪んでゆく景色。

何が悲しいのかは、とうの昔に忘れてしまつた。

ただ泣き崩れることしか出来なかつた。

理由も分からず泣くしかなかつた…今年も桜が散つていく。

私の悲しみとともに散つていく。

何か大事なものを失つていく。

いつになつたらこの悲しみから抜けられるの…?ズギャンドカーン。

そう聞こえたかは、定かではないけど私には、そう思えた。

まるでガラスが耐え切れずに何かに突き破られるような音がした。音を認識したと同時に田の前の空間が窓を突き破るかのように割れる。

中から何か丸い乗り物が飛び出してくれる。

私がそれを乗り物だと思ったのは、それに誰かが乗っていたからだつた。

そうでなかつたら馬鹿でかい食べ物だつただろ？
迷わず私は、走り出していた。

この悲しみの理由が解決しそうな気がしたから。

あの瞬間…たまたま【ディメンションホール】【注釈 空間と空間の間にできる次元の穴】が開らいた。すんでの所だつた。後少し遅かつたらあの壁に衝突して、死んでいたか時空間【注釈 時間軸からずれた空間の中】に閉じ込められていただろ？でもなぜいきなり開いたのだろうか？？めつたに開くことのない【ディメンションホール】が…何か理由があるのだろうか…「い…つつ。ミスつた…もう少し死ぬところだつた…操縦ミスで死ぬなんてほんとに洒落になんねえよなあ…操縦の練習もう少しやつとくべきだつたなあ…」

今さらそんなこと言つてもどうしようもない…。今出来る最善を尽くそう。まず機体の破損状態は？？次にどこに着いたのかだ。頭の中によるべきことを羅列しているとふいに人の声が聞こえてきた。
「ねえ…誰か乗ってるんだよね？？ねえつつねえてばあ…」
ずいぶん変わつたこと…「…とおもいつつ外部モニターに相手の姿を映してみる。

ちょうど俺ぐらいの年頃の娘がいた。妙につかれ切つた感じのする娘だつた。目が腫れていて、今にも消えてしまいそうな脆弱な雰囲気を醸し出していた。何か悩ましいものが存在するかのようにも見えた。俺は、とりあえず現状を確認するためにも外にでることにした。上部ハッチを開け中から出でてみるとモニターから見えた女子の子が

「ねえあなたは、どこから来たの？？なぜこの桜の木の近くに現れたの？？」

と堰を切つたような勢いで俺に話しかけてきた。何か今まで望んでいたものに巡り合えたと言わんばかりの雰囲気を感じた。俺は、そつけなく

「それを教えることは、できない。といひでいいは、どこで西暦何年だ？」

「人にものを聞く人の態度じゃないよ……それに私の質問にちゃんと答えようよ。」

といい頬を膨らます。まるで子供のような仕種をするその娘は、最初にみた印象と違うものだつた。

「あはは…面白いやつだなお前…」

俺は、ついつい笑つてしまつた。するとその娘は、さらりと頬を膨らます。

「ひどいよお…まじめに答えてよお」

「あはは…分かった、分かった。」

と彼女をなだめ、少しまじめな顔になり話を続ける

「どこから来たかは、言えない。ただここに来たのはたまたまだつてことは言える。」

そう俺が答えると彼女は

「そつかあ…あの伝説とは、違うんだよね…何を期待していたんだろう私…」

彼女は、いきなり泣き出した。

張り詰めていた糸が切れたように、子供が泣くように…『奇跡』まさにその言葉が意味することが俺の目の前で起きた。

相棒が突き破つた空間から突然光りが溢れ出し、風が吹き抜け、俺の近くを何か小さいものが通り過ぎる。

それを感じたとほぼ同時に散つていた桜の花びらが舞い上がる。そして意思を持つたかのよう空を舞う。

何かに導かれるかのように桜の花びらが戻つていく。

咲き誇る桜を蘇らせるために、思いを力タチ作るかのようにならぬで過去にさかのぼるかのように、何かを取り戻すかのかのように…流れていった。

深く、深く沈んでいく何かの中に沈んでいく何かに覆われていく何もかもが消えていく何も見えなくなつていく…涙が流れしていく枯れることを知らない涙が流れていく…望んではいけなかつたの？？私は、望んではいけなかつたの？？そんなんことないよ…小さいながらもそう聞こえた気がした。

最初は、気のせいだ。

そう思つた。

悲しみのあまりの幻聴だと思つた。

でもその声は、私の心の奥のほつまで響く音だつた。懐かしく暖かで私が忘れてしまつた何かのよつたな気がした。運命なんかに負けない熱き思い…それがディメンションホールを開けるきっかけを与えた…そして俺を助け、自分自身もこの空間に入り込んだ…知らぬ間に俺は届けていた。君たちに届けたい手紙を…

「ほら目を開けて」らん

今度は、はつきりと聞こえた。

私は、いつの間にかに閉じていた目を開けてみる。すると枯れていったはずの桜が…満開に咲き誇つて私の目に飛び込んできた。まるであのときのように…思いを届ける手紙…愛すべき人の下に戻りたい。その思いがこの奇跡をおこしたのだろう。そつと見守るべきである…彼女達の失われた時間ときを…儂く消え去る時間じまきを…「い…つつ。ミスつた…もう少しで死ぬところだつた…操縦ミスで死ぬなんてほんとに洒落になんねえよな…操縦の練習もつ少しやつとくべきだつたなあ…」

今さらそんなこと言つてもどうしようもない…。今出来る最善をつくそう。まず機体の破損状態は？？次にどこに着いたのかだ。頭の中にやるべきことを羅列しているとふいに人の声が聞こえてきた。

「ねえ…誰か乗つてるんだよね？？ねえつつねえてばあ…」

「ずいぶん変わった」というな……とおもいつつ外部モニターに相手の姿を映してみる。

ちょうど俺ぐらいの年頃の娘がいた。妙につかれ切った感じのする娘だった。目が腫れていて、今にも消えてしまいそうな脆弱な雰囲気を醸し出していた。何か悩ましいものが存在するかのようにも見えた。俺は、とりあえず現状を確認するためにも外にでることにした。上部ハッチを開け中から出でてみるとモニターから見えた女の子が

「ねえあなたは、どこから来たの？？なぜこの桜の木の近くに現れたの？？」

と堰を切ったような勢いで俺に話しかけてきた。何か今まで望んでいたものに巡り合えたと言わんばかりの雰囲気を感じた。俺は、そっけなく

「それを教えることは、できない。とにかく西暦何年だ？？」

「人間のことを聞く人の態度じゃないよ……それに私の質問にちゃんと答えようよ。」

といい頬を膨らます。まるで子供のような仕種をするその娘は、最初にみた印象と違つものだった。

「あはは……面白いやつだなお前……」

俺は、ついつい笑つてしまつた。するとその娘は、さらに頬を膨らます。

「ひどいよお……まじめに答えてよお」

「あはは……分かった、分かった。」

と彼女をなだめ、少しまじめな顔になり話を続ける

「どこから来たかは、言えない。ただここに来たのはたまたまだつてことは言える。」

そう俺が答えると彼女は

「そつかあ……あの伝説とは、違つんだよね……何を期待していたんだろう私……」

彼女は、いきなり泣き出した。

張り詰めていた糸が切れたように、子供が泣くように… 『奇跡』まさにその言葉が意味することが俺の目の前で起きた。

相棒が突き破った空間から突然光りが溢れ出し、風が吹き抜け、俺の近くを何か小さいものが通り過ぎる。

それを感じたとほぼ同時に散っていた桜の花びらが舞い上がる。

そして意思を持つたかのよう空を舞う。

何かに導かれるかのように桜の花びらが戻っていく。

咲き誇る桜を蘇らせるために、思いを力タチ作るかのように…まるで過去にさかのぼるかのように、何かを取り戻すかのないように…時が流れていった。

深く、深く沈んでいく何かの中に沈んでいく何かに覆われていく何もかもが消えていく何も見えなくなつていく…涙が流れていく枯れることを知らない涙が流れていく…望んではいけなかつたの…私は、望んではいけなかつたの…そんなんことないよ…小さいながらもそう聞こえた気がした。

最初は、気のせいだ。

そう思つた。

悲しみのあまりの幻聴だと思った。

でもその声は、私の心の奥のほうまで響く音だつた。懐かしく暖かで私が忘れてしまつた何かのような気がした。運命なんかに負けない熱き思い…それがディメンションホールを開けるきっかけを与えた…そして俺を助け、自分自身もこの空間に入り込んだ…知らぬ間に俺は届けていた。君たちに届けたい手紙を…

「ほら目を開けてござらん」

今度は、はつきりと聞こえた。

私は、いつの間にかに閉じていた目を開けてみる。すると枯れていなはずの桜が…満開に咲き誇つて私の目に飛び込んできた。まるであのときのように…思いを届ける手紙…愛すべき人の下に戻りたい。その思いがこの奇跡をおこしたのだろう。そつと見守るべきであろ

う…彼女達の失われた時間を…儚く消え去る時間を…懐かしい桜に見える。今まで見てきた桜とはどこか違った感じのする桜。私の失われた何か。そうこれ、これが…悲しみとは、違う感情が私の中に満ち溢れてきて、涙が溢れてくる。

「おかれり桜」

ふいに聞こえてきた声。温かみのある声。優しく包み込むような声。もうとうの昔に忘れてしまった彼の声。紛れもなくそれは、私が愛した彼の声だった。私は、振り返らずに

「何言つてんの…それは、私の言葉でしょ…」

最後のほうは、自分でもなんていつたかわからない。涙が後から後から出てきて言葉をつむぎ出せない。

「これは、一本とられたな…桜」

あのころと変わらない彼の言葉。まだ私は、振り返らない。振り返つてしまえば幻の「」とく消えてしまうきがするから「帰つてきていきなりそれは、ないんじやないの…」

数秒間の沈黙。

流れ行く時。

彼の言葉は、返つてこない。

私は、耐え切れずに振り返る…そこには…やはり悲しそぎる。見えていてこちらが泣いてしまった。どうだ。

いくらかのことは言える。

でもそれは、一時の幻にすぎない。時間を引き戻したとしても…それは、この場の力でしかない。最後に残るのは…あの日のままの姿の彼。どこかもの悲しげに見える彼。いつもそばにいた彼。そこには、確かに彼がいた。でもあのころと少し違っていた。彼の姿が半透明に見える。そして彼の体の中に一通の手紙が浮かんでいる。

「どうしてそんな姿に…」

そんな言葉が勝手に口からでていった。

「ごめんな…桜。約束守つてやれなくて」

脈絡なく彼は、言つ。ことを急ぐよう…あらかじめ示してあつた

ものをたどるかのよつてたゞ、彼は、言葉をつむぎだしてこる気がする。

まるで何かを再生しているようだつた。もしかして彼は…

「お前もそりそり氣づいたひだりと想ひ。覚悟ができるでいるだ

るつ…」

やはり彼は…じゃあここにいる彼はなんなのだひつ。

「俺は…俺はもつての世にいない存在だ。この姿も儚く消えゆく幻にすぎない…だから俺の最後の願いを聞いてくれるかい…桜。」

彼は、そつと私に近づき私を抱きしめた。

この夢幻な時がずっと続けばいいそう思つた。

でも儚く消える。

私は、目を閉じた。

涙が頬を流れしていく。

彼の温もりを感じる。

それは、短きときを刻んだ。

彼と私のときを…私は、長い…長い夢から覚めたよつな気がした。微かな温もりが残る腕。

耳に残る声。

唇に残る感触。

まだ彼がそこにいるよつな気がしてならない。

目を開けてみる。

そこには、一通の開かれた手紙が浮いていた。彼がいたその場所。

それは、紛れもなく彼の中にあつた手紙。

私に宛ての手紙。

彼からの手紙。

思いを届ける手紙。

桜へこの手紙が届いてることとは、俺は、死んでしまつたんだな…。

ほんとごめんな…桜。

約束守れなくて。

お前のことだからずつと泣きぱつんしだつたんじゃないか??それとも俺のことなんかもうすっかり忘れてしまったのか。

まあそれは、どちらでもいい。

ひとつだけ言う俺のことは、もう忘れてくれ俺は、もう死んだ人間だ。

いつまでも俺のことを引きずるな。

最後になるがお前にプレゼントがある俺の最初で最後の贈り物だ。手紙を読み終わったらこの手紙を閉じてくれそうすればお前の望んだものがある。私は、手紙を読み終わると二つ折りに閉じた。すると手紙は、まばゆい光りを放ち、風を…大気を…吸い込み何かを形作り始める。次第に形がはつきりしてそれがリスだと分かる。

「忘れていなかつたんだ。私がリスを好きだってこと…一生大切にするね…私たぶんあなたのこと一生忘れないよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3673a/>

君たちに届けたい手紙

2010年11月25日18時25分発行